

なまけ者 讚

——三年寝太郎と物草太郎——



大澤 京子

稀代のなまけ者が主人公として登場する昔話は、グリム童話の「ものぐさハインツ」「ものぐさ三人むすこ」「ものぐさ十二人おとこ」「糸くり三人おんな」を代表としてヨーロッパにも広汎に分布し、日本においても南は琉球から北は東北まで広く流布している。

場所によって話のモチーフは異なるが、一番単純な形は、福島県南会津郡で採集された「物草太郎」の話で

ある。主人公は、働かないで暮せるように神に祈願し、満願の日に三つだけ願いの叶う打ち出の小槌を授かる。はじめに「白米飯と汁」、次に姿様のために「水」を望み、願いは叶えられた。三つめに「米倉（こめくら）」を願ったが、子盲（こめくら）が出て来てしまい、その後、心を入れかえて働くようになった。（日本昔話大成6）へなまけ者が巧妙な知恵をめぐらして長者の娘婿とな

り、幸運をつかんだ後は心を入れかえて、生まれかわったように働きの者になる」という話は、一番数多いモチーフである。主人公は、いつも小屋で寝ころんでいるとか、『グッチャネ』『睡虫』と呼ばれるような、「食っては眠り、覚めては食い」という無精者ばかりでなく、明けても暮れても寝てばかりいて、三年にたった一度しか目をさまさず、老いた親の仕事を手伝わないばかりか、親に面倒を見てもらっている者もいる。

その主人公のひとりには、ある日何を考えついたか、親に白鷺を買ってもらう。神様の格好をして隣家の長者の大榕樹ガジュマルの梢に登り、「娘の婿には隣の次良のほかにない」とお告げをした後、白鷺を放ち長者を信じこませ、ままと長者の婿になる（睡虫次良・琉球）。野鳩に鈴をつけて放つ（寒田嘶）。

長者が観音堂に夜参りをして、良い婿が来るように願掛けしているのを知って、物陰から声をかける（老嫗夜話）。

天人が爆竹とともに策を授けたので、長者の家の大木

に登って婿にせよと脅す（南島説話）。

など、様々な形であるが、一たん「天の声」を聞きつけると、がぜん行動的になり、神を装うというような、神の力を借りて、長者の家へ婿入りするという幸運を手に入れる。この話の類型としては「仲間の助力を得て、醜い顔の男が顔の良い婿を望んでいる長者に婿入りする（搏打婿入りの事・宇治拾遺物語）」や「畑の蕪ばかり焼いて食べ。米田飯をうらやもうともしなかった笹四郎に、村の若者たちがいろいろ細工をして川下の長者に婿入りさせる（蕪焼長者）」などもある。物臭な男が一株の菜が生えていたのを一葉ずつ欠いて食べ、だんだん葉がなくなり、しまいに株をひき抜いてみたら、根の穴の中から酒の泉が湧き出し、たちまち大金持ちになる（せやみ太郎兵衛・出羽荘内）は、「たなからぼたもち」的に幸運が転り込むところは少し異なるが、類型の一つと考えてよいかも知れない。

主人公は、のらくらとして働かない、とか賭博をして人に嫌らわれて除け者にされるが、ある時、急に、それ

までと違った行動を起し幸運を手に入れる。この筋立ては、現実生活に満足していない人々を楽しませる空想話として効果があつたのだろう。また、婚姻形態の歴史を考えると、現代の「嫁入り」が主流となる前は、男性が女性の家に通い住みつくという、招婿婚が「掣捕り」と呼ばれて存在していたので、生まれた家よりも身分・位の高い家の掣になる、と言はば「玉の輿にのる」ことが、幸運としてとらえられていた、という見方もできそうだ。柳田国男によれば、説話には少なくとも道化たのまじめなものと二つの種類があつて、語りをするにも男女の分業があり、ひとり合戦や変化退治などの荒くれたものばかりでなく、聞き手の笑いをうながすような話は、必ず、男がするもの、ときまっていたらしい。寝太郎のなまけの様子は苦笑を誘い、神様を装って誑かすところは、権力者に対する弱者の嘲笑を誘う。三年寝太郎の昔話は、「笑い」の部分が強調されて、男性が語りついでいったものと考えられる。

お伽草子とは、室町時代を中心に大流行した短編小説の汎称で、この中にも寝太郎の話が収められている。それまで「語る―聞く」という形で受け継いできた昔話をまとめ、時代と聞き手に合った形に改めたもの、どちらかと言えば、大人の童話風になったものと言える。「毎日一度、此さうしを讀みて人に聞かせん人は、財宝に飽き満ちて、幸ひ心にまかすべしとの御誓なり。めでたき事なかなか申すもおろかなり。」という結びには、文字に定着しても、更に、語り伝えることを望む、昔話の名残が見られる。

お伽草子の「物くさ太郎」も、やはり、滑稽に話の重点が置かれ、前半の徹底的な「ナマケ」の部分と後半の妻求めの時の「ママ」の部分に対照的な面白さを見ることができる。

名前は、物くさ太郎ひちかす（富士正晴氏は、泥・滓という字を当てている）と言ひ、のみ、しらみ、あかにまみれた、たいそうな無精者である。「もとでなければ商ひせず、物つくらねば食物なし。四五日のうちにも起

き上らず臥せ居たりけり。」と、怠け方も徹底している。情けある人からもらった五つの餅を四つ食べ、残りをとっておくつもりが道にころがしてしまふ。取りに行くのもめんどろだが犬やカラスに食べられてしまふのも口惜しいと、竹竿で追っている。物くさ太郎が単なる無精者ではないらしいことは、餅をとってくれるようにたのんだのを無視した地頭に、「あれほど物くさき人にどうして政治など出来るか」と腹を立てたり、実際は四方に竹をたてこもをかけた住居でも、本人は松皮葺の大そうな御殿に住んでいるつもりでいることから伺い知ることができさる。

地頭は餅をひろってはくれなかつたが、問答の末、「毎日、三合の飯を二度、酒を一度与えるよう」村民に触れを出す。そして、三年目の春、長期人夫の徴用が課せられると、「男は妻を具して心つく（思慮分別がついてひと並みになる）、都の人は情ありて、いかなる人もきはらず、色深き御人も互いに夫妻とたのみたのまるゝならひなり。されば都へ上り心あらん人にも相具して、心もつ

き給はぬか」とうまく言いくるめられ、物くさ太郎は京へ上る。

都は面白い所だったらしく、汚らしい姿であっても「いかようにもあれ、まめにてつかはれなはしかるべし」と召し使われ、三日のつもりが七日も勤勉に働いた。都に身につけた「マメ」な部分は、妻求めのときに発揮される。昔話とは異つて、婚姻形能が「嫁取り」に変化したことも、物くさ太郎の積極的な行動に効果的に作用している。ここでの妻求めの形態の辻取りとは、掠奪婚の一種で、中世に於いて路上で好きな女をとらえて妻にする風習である。国もとにいたままの汚らしい格好で、美しい女房を捕えようとする外見の滑稽さに加えて、才気煥発な女房に物くさ太郎は気のきいた応答をし、和歌も上手に詠むという内面の滑稽さもある。一たんは逃げたしまった女房を歌の言葉を手がかりに探し出し、傍若無人の天性の楽天的気性でせまつて女房を妻にしてしまふ。その後は女房の働きで出世をする。

ころがった餅を拾いに行くのもモノクサイ男が「京に

上る」というきつかけから、マメに働く男に変身する。国にいたときの物くさ太郎は、前に述べた地頭に対する気持のあり方などから見ると、彼なりの論理で動かないのである。しかし、京都へ上ると、論理と行動が一致し、自分自身の力で行動する主体的な男へと変化し、更に良き伴侶を得て出世する。はじめは、外見の汚さのためにバカにしていた女房も、ずうずうしさと歌の才能からただの無精者でないことを知り、本来の力を發揮する援助をする。

お伽草子の成立した室町時代は、社会全体が流動的であったために、実力があれば自分で生き方を選べる時代であった。佐竹昭広氏が「下剋上の人間の相対的愚行が革命的エネルギーとしての無知に該当する」と述べているように、物ぐさ太郎の「モノクサ」は、自分で新しいことを起すときのエネルギー源となるものであって、ただ単に「果報は寝て待て」的な消極的なそれではない。寝太郎の話が、神の力を借りるのではなく、自力で手に入れる形で定着したのは、この時代では当然といえるの

ではなからうか。問答に見られる「ことばあそび」「和歌のやりとり」には文化の形が、物くさ太郎を受け入れる女房が「女は五障三従に罪深きに（女は、梵天・帝釈・魔王・転輪聖王・仏身になることはできないという障りがあり、結婚前は父に、結婚後は夫に、夫の死後は子に従うという三つの従がある）」と涙を流すところには女性の立場が垣間見ることが出来て興味深い。

前述の佐竹氏は『下剋上の文学』によれば、お伽草子以降、文字に記録されたものとしては、浄瑠璃「十帖源氏物ぐさ太郎」がある。「此浄瑠璃は是と申す所は見へませぬが、其かはり、ここが悪いと評うたる所はない（評判義多百韻貞）」と毒にも薬にもならないような受け入れられかたではあるけれど、寛延二年から明治二十四年まで、大阪・江戸・京都で何度も上演されている。主人公は、実は千利休扮するところの「つくりあほう」であり、昔話の怠け者の大らかさを失って、愚鈍性が強調されているらしい。後半の中心となる辻取りが主取りと変化し、「今時へら／＼寝てゐたら病い者か無精者。どぶ

でろくなやつぢや有まいと人が見てて抱へぬはい。果報は立て待て。」と良い主君を持つことが人生の成功者なのだという短絡的なものへ変ってしまったている。

現代では、木下順二氏が「夕鶴・彦市ばなし」の中で三年寝太郎を再話している。

寝太郎は、寝たままで知恵をめぐらし、身代と長者の娘を手に入れるという筋である。正直な働き者をだまして金をまきあげ、過保護な母親は、寝太郎の言うことならば、何でもすぐに「あいよ」と聞いてくれ、寝太郎の悪知恵の片棒をかついでいる。長者の娘と大金を手に入れた寝太郎は、「おらのように年がら年中寝とつても、知恵さえめぐらせば何でも思い通りに行くものだ」と大笑いをし、その後も働き出す気配さえもない。「寝てばかりいる怠け者は、時が来れば、本来持っている力を発揮する働きものの仮りの姿である」という、昔話の寝太郎話の面白さは消失し、「できるだけ自分は楽をして、得るものは出来るだけ多く」という視野のせまいものになっ

現代の人々の置かれている環境では成長の過程は、点数や金額のような単純明快なたちで段階点に示され、余程の傑出した人物でない限り革命的エネルギーを発揮するチャンスは与えられない。社会の動きの中で疲れ切った大人たちは、仕事を離れた家庭で「テレビとゴロ寝」という受け身の娯楽と休息で時を過ごしている。これは、モノグサには見えるが、「現実回避型モノグサ」であって、消費した分だけの明日へのエネルギーの補給にはなっても、新たな飛躍へのエネルギー生産にはつながらない。

心理療法の立場として河合隼雄氏は、怠けについて次のように述べている。「……自分で解決を見出せず、治療者も頼りにならぬと知り、まったく行きづまってしまったこの人は、退行現象を体験し始める。今まで、無意識の方から意識の方に流れていた心的エネルギーが、逆に意識から無意識へと流れはじめるのである。これは、今まで意識が依存してきた規範に頼れなくなったので、それに対立するものが無意識内に形成され、この対立の

ために心的エネルギーの流れが乱されて、むしろ逆流が生じたのである。このとき、この個人はまさに「怠け」の状態になる。あるいは行動するとしても極めて馬鹿げたことか、幼稚なことをするにすぎないだろう。心理療法家としては、このような退行現象に耐えていると、その頂点に達したと思われるころ、エネルギーの流れの反転が生じ、それは無意識内の心的内容を意識内へとたらし、そこに新しい創造的な生き方が開示されてくるのを見るのである。昔話の寝太郎の「ナマケ」は河合氏の言う「創造的退行」であり、現代の物ぐさ太郎は、「テレビとゴロ寝Ⅱ（見せかけの）ナマケ・仕事への逃避Ⅱ（見せかけの）マメ」を繰り返しているままでは、ますます骨抜きのものになってしまうだろう。

子どもの世界にも、生き方を測るモノサシは、細密なめもりで正確に測れるものが入り込んで、子どもの生活を息苦しいものにしてしまっている。段階を追って、こまかい目標がたてられてしまうと、子どもたちは自分で選択するとか、息を抜くというような余裕を与えられ

ず、いつも、大人に「早く！急いで！」とせき立てられてしまう。しかも、「ハヤク・ハヤク」と日々追いつたてられているわりには、「子どもは、できるだけ子どもそのままでおきたい」という大人の矛盾に満ちた気持が、一方には働いているのである。「せめて、子どもの時だけでも、昔話やお伽草子の太郎たちが持っていたようなゆとりの時間を持って、心の中にうまれてくる創造的エネルギーの呼びかけに耳をかたむけることができれば……」と願うことは、「大人になり切れない大人」の練り言なのだろうか。

（岩手大学）

